

第百九十三話 主敵を見誤った？

日本は大陸における国際的に合法的な権益を守りたいが故に、不拡大を標榜しつつも、押し寄せる脅威への反撃及び一撃論に基づく攻撃を繰り返しているうちに大陸での戦線が拡大し、結局は抜けるに抜けれなくなってしまった。この泥沼化には仕掛け人が居る。(第百九十一話及び第百九十二話参照)

1 第二次国共合作

1935 (S10) 年7月モスクワで開かれた第七回コミンテルン世界大会で重要な決議が為された。「ファシズム組織等への潜入・内部崩壊」「共産主義化の目標として日、独、ポーランドの選定及び「これら三国に対しての英仏米と連携撃破」「日本共産主義化のため中華民国重用」の決議である。



西安事件 (1936/12/12) を機に、コミンテルンの指示もあり共産党は国民党との合作に活路を見出そうとした。「内戦停止と一致抗日」を約束させられた蒋介石の国民党南京政府と共産党は、1937 (S12) 年3月和平交渉で合意した。蒋介石は盧溝橋事件 (1937/7/7) に際してもその決意表明にも拘わらず日本と妥協的であったが、南京政府内の抗日体制が強まり、8月8日には「全将兵に告ぐ」演説を行い抗日戦の決意を表明した。第二次上海事変 (1937/8/13～) が勃発するや国共合作が進展し、9月23日国共合作 (～1945/8) が成立した。

共産党に懐疑的な蒋介石ではあったが、ソ連との中ソ不可侵条約の締結 (1937/8/21) と共産党の合法化による共産主義勢力との連携で難局の打開を図らざるを得なかった。一方、壊滅寸前・風前の灯火であった共産党は国共合作により生き延びることが出来た。共産党軍は国民革命軍の八路軍或いは新四軍となって、国民党の各種援助を受けた。

2 暗躍

- (1) 盧溝橋事件の拡大の仕掛け人 第一発の犯人？ 廊坊事件や広安門事件は？
直後のコミンテルンの中国共産党に対する指示、宋哲元の29軍の性格？
- (2) 反日・悔日の扇動者は？ 反日ナショナリズム燎原の火の如し
- (3) 日本との和平工作が頓挫したのは？ 妨害工作
- (4) 日本との妥協的要人に対する糾弾、漢奸・売国奴として排除

3 漁夫の利を得て遂に共産党国家建国 (1949/10/1)

日支両軍を疲弊させ、自らは態良く逃げ回って勢力温存と拡大を図り、遂には大東亜戦後の国共内戦に勝利した共産党は念願の建国を果たした。毛沢東は、1961 (S61) 年1月24日中国訪問社会党国会議員に『日本軍に感謝』発言をしたとされるが、本音を吐露したものだ。

4 日支双方にとっての主敵は誰だったのか？

失敗の英雄とも呼ばれた孫文の命でソ連赤軍の軍制視察をした蒋介石は、コミンテルンの目論見を見破り進言したとされるが、孫文の容れるところではなかった。

共産党に対する警戒感があったものの、難局打開のために悪魔とも手を結ばざるを得ず、時に反発し合いながらも国共合作は継続したのである。そして結果的に、共産中国に台湾に追われることとなった。主敵を見誤ったとも言えるだろうし、蒋介石をその方向に追い込んだ日本にも責任の一半はあるのかも知れない。日本だって、対ソ脅威論が強かった筈だ。第一次近衛声明 (1938/1/16) の「国民政府を相手とせず」は果たして妥当だったのか？ 共産党を利したのみでは？ 蒋介石も日本も、主敵を見誤ったのではないかと考えざるを得ない。現今の東アジアの情勢を考えると、特にその感を強くする。

- 5 支那事変を裏で操っていたのは、コミンテルンであり、米国であり、ドイツである。
日本はそれが解らずに引き摺りこまれたのだ。

(第百九十三話 了)